

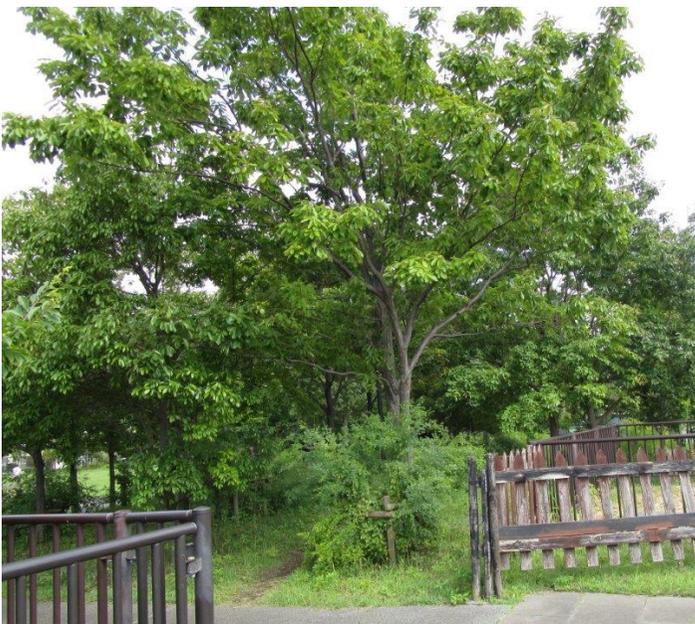
	<p>2017年 11月15日 第123号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://mizumidori2.eco.cocacn.jp E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	--

自然とのつきあい方を考える 桑袋ビオトープ公園の見学から

9月30日、会有志で桑袋ビオトープ公園に行きました。この公園は「自然と共生するまちの実現をめざして」廃校になった小学校の跡地に作った足立区の公園です。2005年開設、面積は約9000㎡、木を植え、綾瀬川支流の水を引いたため池と大賀ハスを植えたハス田、草地、そして自然を楽しく学ぶ施設「あやせ川清流館」があります。ここはいつでも入れる公園ではありませんが、開園日には、専門のインタープリターがいて、自然について教えてもらったり、考えさせてくれたり、自然を楽しく学ぶ体験イベントを企画されています。インタープリターとは、自然と人との仲介となって自然のメッセージを伝える人です。

私たちは開設して2年たった2007年6月に見学に行き、今回は10年ぶりです。

昆虫網を振り回している子どもや、親子で大きなザリガニをつり上げていたり等、家族連れが自然の中でおもいおもいに過ごしていました。



何も無いところから自然をつくって12年たったらどうなったか、周囲に植えられた木は立派な森になっていました。丘のうえに植えられたコナラの木（写真左）が大きくなって枝を広げ、木の下にドングリがいっぱい落ちていました（公園の中の自然物は持ち帰ってはいけないルールで、ドングリも持って帰ってはいけないと言われました（えーっ、きびしい!!）。

ではザリガニ釣のザリガニはどうなる???

ここではいつでもできる「ザリガニ釣ボランティア」という立派なボランティア活動になっています。赤塚トンボ池同様、増えてしまったザリガニによって、水草やヤゴが激減するなど水辺の生態系が破壊されるため、ここでもやむを得ず駆除しています。

ザリガニ釣ボランティアのやり方は?

まず清流館で受付、初めての人はザリガニクイズで勉強してから、釣り竿、餌、バケツを借りて、ザリガニ釣り、終わったら清流館で道具を返し、ザリガニのオスとメスの数を調べてこれも渡します（持ってかえれない!!）。ザリガニが増えたため2009年からザリガニ釣ボランティアがスタートし、年間3000人～4000人が参加、2009年から2016年までの総捕獲量は50000匹。ザリガニ釣りボランティアの参加者数にもザリガニの捕獲量にも驚くばかりです。釣ったザリガニですが、同じ区の施設「足立区生物園」の大型魚の餌になるそうです。私たちも日頃ザリガニを捕獲していてもオスメスの区別がよくわからなかったので、教えてもらいました。

ザリガニ釣りボランティアの活躍で、ヤゴも増えてきて、確実に成果が上がっているそうです。

赤塚トンボ池はフェンスで囲まれています。フェンスを越えて出入りする人も多く、生き物の出入りも自由、ヤゴはまだいません。

昆虫採集はできるの?

受付で、子どもはビオレンジャーとして登録してから、網と虫かごを借りて、虫取りができます。取った虫は、館内で名前を調べたり、絵を描いたりして観察した後、もといた場所に放します。なので虫も持ち帰ることができません。ビオトープ公園にいた虫の写真集があり、採集した子どもの名前も一緒に

記録されてアルバムになっていました。まだカブトムシは来ないそうです。またカエルは、外来種のウシガエルが定着しており、付近にヒキガエルが見られることがあるのですが、この公園にはまだ定着していないようです。



ザリガニ釣の様子

(写真提供：桑袋ビオトープ公園)



ため池にきたカワセミ (撮影：新井 康之)

(ため池は川の水を引いているのでカワセミの餌になる小魚も、ザリガニもいる)



写真左上は生き物達のための草地。
写真右上はゴマダラチョウの越冬場所を保護する柵です。ゴマダラチョウの幼虫はエノキの葉を食べます。冬になると木から下りてきてエノキの枯れ葉にくっついて冬を越し、春になると、また木に登って若葉を食べます。柵によって、エノキの枯れ葉が飛散しにくく、幼虫も守られます。右下に説明板があります。写真の上に、竹の筒が見えます。筒には「これを引いて下さい」と書いてあり、引っ張ると、木の説明が出てきます。木に名前がついている公園も見かけますが、この方がおもしろそうです。

館内には、展示や遊びながら自然の不思議に出会えるクイズなどがあって私もけっこう楽しめました。館外には、公園に生き物が来やすくするための方法、家庭でも生き物がやってくる工夫（手のひらビオトープのすすめ）が、展示されていました。一つずつ積み重ねて、自然と共生するまちが実現していくことを思いました。



伊藤正哉さんに公園の中を案内していただく

委託された専門業者（(株)自然教育研究センター）が自然を保全し、自然とは何かを学びながら保全に関わるボランティアを養成し、環境教育のフィールドとして生かしていく、という方針は、開設時から継承されていました。ボランティアは2年間勉強（講座もあれば園内外のフィールドワークもある）した後、3年間公園ボランティアとして活動します。3年後も継続する人は、それぞれの提案に基づいた自主活動になるそうです。自然地の維持管理、人の養成、自然教育等々には、経費もかかります。それをケチらずに、総合的にすすめていく行政の姿勢もすばらしいと思いました。

「自然と共生する」という言葉だけお手軽に使われていますが、何をするのか、それによってどうなったか、は問われません。

私が子どもの頃、蒸し暑い夏はよく夕涼みに出かけました。夜のまちは今ほど明るくなかったこともありますが、街灯に虫がぶんぶん集まり、地面には明りにぶつかって落ちた虫がころがって

いました。あのとき、虫は夜にはいくらでも湧いてくるような存在でした。自然の空間がほとんど失われてしまった今、人類の存続の根っこである自然を学び、自然との付き合い方を学び、ルールが必要と思います（坂本 郁子）。

「身近な自然と私」についてあなたのひと言を

都会人の自然観もいろいろ、家のそばにはいらぬ、落葉や虫はいやと思う人もいるし、楽しんでますよ、と言う人もいます。「私たちにとって身近な自然ってなんだろう」をみんなで考えてみたい。

身近な自然と私 向新田の森（喬木 千佳子）

春にはウグイスが鳴き、夏は蝉が力いっぱい鳴いています。

カラスが子育てした年もありました。風が強いので巣は飛ばされそうでしたが。

大きなヘビが（森の守り神？）サツキの花壇から柵を越えて森に入ろうとするところで、ヘビと眼が合い時間が止まった感じがしました。

小さな雑木林ですが、人間が関わらない素敵な森です。和光の森と光が丘の森を繋ぐ小さな森です。

身近な自然と私（小林 良邦）

私は昭和19年生まれ、大田区の馬込で育ちました。家の周囲には戦災消失跡の野原が至る所にあり、就学前には日がな一日友達と虫を取ったり、草笛を吹いたり、秘密基地を造ったり、焼夷弾の外殻を拾い集めたりと、ガキ大将をリーダーに「遊び」を創り出していました。少し遠出をすると田畑地帯。夏の炎天下では用水路に入り、どじょうやザリガニ採り。秋の夕暮れには赤とんぼが群れをなして舞い、暮れると姦しい程の虫の声に満たされました。今、振り返れば、私の幼少期は紛れもなく「自然」と共にあったのだと思い起こされます。

中学進学ころから、私の生活から「自然」との共生意識は次第に薄らいでいきました。友人との登山や海水浴、家族旅行などは楽しい思い出であり「美しい自然の大景観」ではありますが、「非日常のハレの自然」でしかありません。私にとっての「身近な自然」は日常生活で眼にする草木に、かろうじて四季の移ろいを感じる程度にまで貧しくなっていました。

退職後、「自分が住む板橋」を全く知らないことに啞然として、いくつかの環境活動団体に加えて頂き、板橋の自然に触れたいと思いました。その根底には幼少期の記憶が強く作用したのだと思います。陸続とマンション開発が続く中、板橋の自然を少しでも保全していくために、微力ながら活動を続けたいと思っています。また、子ども達と一緒に「遊び」たいと思っています。このことは最近読み直した灰谷健次郎氏の諸作品から「教育とは何か」「自然との共生とは何か」に改めて感銘を受けたことにもよります。

先日の「バッタ広場の虫とり」イベントに参加させて頂きました。「おとうさん、おじさんおじさん。バッタとれたあー」と歓声が。その声に皆の顔がほころびます。皆で採集した昆虫を観察した後、それらを放虫しますが、どの子も素直に草むらに返していました。「いいなあー」と思いつつ私の頭には幼少期の思い出がよみがえっていました。

身近な自然と私 観察会で出会うスズメバチのこと

(千葉市 K. O)

千葉でも観察会をしています。駐車場があることが、家族連れが来る事の条件かもしれません。子どもは虫を持って行くなと言っても、なかなか難しいですが、家族で来る人たちは大人が教えるしかないと思います。

それでも捕っていくのは仕方ないです。

身近な自然についてですが、例えば、スズメバチのことも、子育てをしているハチが、急に巣のそばに、ヒトが大きな声を出してドタバタやってきたら、大事な子どもが危険にさらされると思って、襲うわけで、スズメバチの親の気持ちになったら、巣のそばに近づかないことが、とても大事だと話すと、子どもも大人もわかってくれます。

スズメバチ=コワイ、ではなく、自然を通して、相手を知る、ことの大切さが学べるのです。

オオスズメバチはそばに行くと本当にこわいです。でも他のスズメバチはそうでもない。モンズズメバチが杉の伐採木に営巣していますが、そっと1m近く近づいても襲ってきません。この時期、雄も出てきますが、雄は刺しません。毒針は産卵管の変化したものだからです。

そういったこと、コワイ相手でも、相手のことを知ると、そうでもなくなり、身近にさえ思えます。

身近な自然と私 (子どもたち)

かつてあった板橋区の自然を想像しながら・・・(紫垣伸也)

板橋において自然というものは、かつてはどこにでもあったものではなかったのでしょうか。家を一步出れば、木があり、林があり、土の道があり、田んぼがあり、畑があり、さまざまな昆虫や生き物がいて、広い空き地があり、夏には水遊びもできそうな小川もあったのではないのでしょうか。80数年前に板橋区に生まれた私の知人に、子どものころは初夏になると板橋区内で当たり前のようにホタルが飛び交っていた、と聞いたことがあります。

それが、今ではホタルはどこを探してもいないし、他の自然も保護しなければどんどん失われていくものになっているようです。

なんでこんなことになってしまったのか。

それはひとえに人間の仕業と言えるでしょう。

人間が木を切り、土の道や小川にアスファルトをかぶせ、自動車を走らせ、田んぼや畑をつぶしそこに無数の住宅を建てた結果でしょう。住宅は大きな壁となり、板橋区のいたるところで見たという富士山もほとんど見えなくなってしまいました。

人間の仕業、特に大人の仕業です。大人によって失われた自然の中に生まれたのが今の子どもたちです。

自然が壊される過程を目の当たりにしてきた大人たちに聞きたい、壊される前の自然と触れ合

い遊び育ってきたかつては子どもだった今の大人たちに聞きたい、板橋の自然環境はこれでよいのでしょうか。

「ここまで破壊されてしまったらもうどうしようもないよ。」というのが現実なのかもしれません。しかし、そう言ってしまったらおしまいです。

私は、生き物たちのためだけでなく、子どもたちのため、豊かな人間生活のために自然は守らなければならないし、失われてしまったものでも可能な限り取り戻さなければならないと思います。そういう意味で、「いたばし水と緑の会」のような活動は大事だし、同様の活動が板橋区各地で増えていってほしいと思っています。

成増1丁目向新田の森のようす

この森は2008年に隣のマンションが建設されたときに区に提供された緑地で、閉鎖管理されていて鍵がかかっていて中には入れません。マンション開発と緑地整備に対して住民や私たちも要望を出し、隣の開発地に生えていた植物を移植しました。水と緑の会は、成増1丁目向新田の森守る会の高木さんと連絡を取りながら、年に1度は林内の調査をしています。林内に侵入し蔓延っているオカメツタや園芸種のトキワツユクサを抜き取り、実生が育ちやすいようアズマネザサを刈ったりしていました。林内が安定してきた昨年は、移植した植物のようすを確認するだけでした。アズマネザサが林床を守り、人が関わらない自然の森に育ってきています。10月28日、林内には、開発された森に自生していたゴンズイやウグイスカグラなど移植した木も健在で、ここで芽生えた木も育って黄葉していました。移植した野草の中には消えてしまったものもありそうですが、下刈りが頻繁な区立の公園には絶対生えていないノイバラ(写真右下)がありました。強い風で落ちた枯枝もありましたが、ここは人が入らない森、私たちは何もせずにそっと立ち去りました。



ました。民地や道路に接する木や電線にかかる高木の枝切りはやむを得ないことですが、周囲の林床にも影響を与えます。

今年は北部公園事務所から成増ハウスの高木さんに、斜面林の電線にかかる高木の枝を切るとい連絡があり、高木が何本か枝切りされていました。斜面の茂みの一部が若干スカスカになって、実生木が刈られた跡があり



雨が多くて散々だった赤塚トンボ池

今年は台風も多く雨が多かったですね。トンボ池は湧水を引いてきているのと、排水口がないために、雨が降り続けると、水位が上がり畦を超えて水がたまってしまい、水が引くまで時間がかかります（やはり欠陥ビオトープ池です）。

深くなった池にコイが7、8匹放され、生きたコイも捕獲しましたが、水が引いてきて水草の茂みなどで多数が死に、腐って悪臭を放ち、回収するのはいやな作業でした。また雨が強かったため泥も流入し、池底に泥がたまり、池の浸透穴も埋まってしまいました。

冬になったら、池の手直しをしなければならないので、11月11日池の中の水草等を刈り取りました。隠れ場所のなくなった棚田の畦に大きなヒキガエルが出てきました。寝ぼけまなこです。ごめん、ごめんと山際の草むらに移してあげました。

池周りの草刈で、越冬中のクビキリも飛び出してきました。刈ったあとに、小さなクモいろいろ、カメムシ、ザトウムシ、他にわからない小さな虫がごそごそ動いていました。私たちが池や周りの草地に手を入れることで、そこにひっそりと生きていた生き物達の環境を脅かしてしまいます。ごめん、ごめんです。

刈った後、水を入れて、池の状態をチェックします。理想からほど遠いトンボ池ですが、どうぞよろしく見守って下さい。



写真左上：草を刈ってさっぱりした池。

写真右上：クビキリギリス、枯葉と同じ色で、みわけにくい。

写真右下：大きなヒキガエルは池の主？

活動のお知らせ

運営委員会：11月25日（土）12：30～13：30

12月23日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先：坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：1月20日（土）12：30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田（3969-7124）まで

活動予定いろいろ

- 1 赤塚ピオトープ（赤塚トンボ池、大仏下ミニトンボ池、バッタ広場）の環境整備と観察。
集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）（予定を変更する場合があります）

11月25日（土）10：00～11：30 バッタ広場の手入れ

12月16日（土）10：00～11：30 バッタ広場の手入れ

12月23日（土）10：00～12：00 トンボ池大修理（未定）

2 日暮台公園樹林地の観察

12月2日（土）、1月6日（土）いずれも10：00～11：30 日暮台公園前集合
（連絡は坂本 090-4618-1295まで）

9月初め斜面林の高木が11本切られ、出井川の対岸の森（中台の森）がよく見えるようになりました。下草が刈られたあとに、早春のようにクズなどの芽が出てきました。これからどうなっていくのか、下刈りをくり返して、はげ山→コンクリート擁壁になるのか、見守っていきます。

3 赤塚公園の自然を考える ワークショップ

—多様な生物が生息する都立公園づくりに向けて

12月17日（日）14：00～16：30 場所：四葉集会所

主催：東京都東部公園緑地事務所

申し込み・問い合わせ：03-3291-3380 愛植物設計事務所

●ピオトープ管理のボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの管理作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。